

たのです。私は、いちばん先に体育館に出かけていくものから、1人で体育館全部を雑巾がけしたような日もずいぶんありました。最初のうちは大変つらくて、足腰が疲れて練習どころじゃないという日がありましたが、やがてそれも楽になりました。雑巾がけは体力をつけるにはなかなかいい訓練だったと思います。

(中略) 野球のピッチャーをやっていたから体力はそうとうあったのですが、雑巾がけはたいへんよかったです。』

『そうやって3年生の終わり近くになりました。だいたい西高では2年の2学期が終わると部活動はやめるのですが、私はなんとなくリーダー的にもなったりしていたので、どうしてもやめられなくてずっと続けていました。わりあいレベルの高い学校で東大には現役が60何人で、浪人を入れて70人ぐらい入ったのです。わりあい出来のいい学年でした。私は、なんとかして1日も卓球を休まずに受験勉強しようと考えたのです。というのはほかに取柄がないから、卓球ぐらいはちゃんとやってみようと思ったからです。しかし、母親にはまさか卓球を1日も休まずに受験勉強をやるとは言えません。「風呂へ行く」といつて出るので。3キロほどの道を15分ぐらいで走って行き、卓球の練習を30分から40分ぐらいやって、それからまた15分ぐらいで走って帰ってきます。真赤な顔をして帰ってくるので、母親は本当に風呂に行ったと思って信じて疑わなかったのですが、1日も休まず卓球をやりました。ですから、卓球をはじめから学年試験中でも1日も休まず練習をして、それがために高校では“卓球気違い”だということてたいへん有名だったのです。(中略) 好きだからへ理屈をつけたのです。友達にコテンパンにコキ下ろされた経験があります。そのころは、肥満体の日本人など1人もいませんでした。みんなその日のくらしに精一杯だったころのことです。友達の間には現実が即していました。そんなふうな論争をしながらも受験勉強と卓球の練習を続けました。12月ぐらいからかなり本格的にやりはじめたのです。「受験勉強というのは単に受験勉強、本当の勉強じゃない」というふうに割り切り、それほど大事なものには思わなかったのです。そのかわり、受験勉強としてのやり方を徹底的にやろうということで、ほとんど問題集だけで受験勉強をしました。問題集ばかりを徹底的にやったのです。スポーツと同じで小さな成功感の積み重ねが大切だと思いました。1問やると自分の口に何か1口食わせてやるという方式で徹底的にやりました。』

『卓球に魅せられて30数年たったいま、私はたいへん貴重な経験をさせてもらったと思っています。同じように一心不乱に努力した人たちが前にいたのに、私は時代の波にのり、その人たちは味わえなかった果実を私が味わえたのは運命というか歴史のいたずらというか、私にとってはラッキーのひと事につきます。特に私にもたらされた好運は、国際経験でした。卓球であったからこそ、70カ国にも及ぶ国ぐにのひとと交流できたのかもしれない。』

それにしても、もし卓球がまさきき国際復帰を許されなかったら、佐藤さんのボンベイ優勝がなく、私のロンドン優勝もありませんでした。もし、山口一郎君に全日本予選で負けていなかったら、そして全日本でそこそこの成績で終わっていたら、もし矢尾板さんに強く推してもらわなかったら、もし西高や武蔵野の人たちにめぐり合わなかったら、と、“もし”の連続の上に成り立った私の経験でした。人間万事塞翁が馬(世の吉凶禍福の転変常ないこと)という言葉がありますが、ふりかきり、立ちばかり、後押しされ、導かれることどもは、なにがほんとうに自分にとってよくて、なにがほんとうにわるいのか、その場で有頂天になったり愚痴ったりするのは、人間の判断力はあまりにも低すぎるようにも思います。少なくとも、人をあてにした上の結果に不満を持つのだけはやめるように、自分にいいきかせるようにしています。』

(中略)

『スポーツは芸術であり、スポーツマンはアーティストです。彼らのパフォーマンスは、私たちの時代のような自己犠牲の上のみ成り立つべきものでもないでしょう。むずかしい問題がたくさんあるのですが、確信をもてる部分をすすめてゆきたいと思っています。』

荻村さんはその後、私たちが、あの空に舞う原田を見て感動した長野冬季オリンピック(1998年)を、文字通り命がけて誘致され、残念ながらその感動を味わう直前に永眠なされました。私は、荻村さんに、畏敬の念と志(こころざし)を誓うつもりでこれを読みました。

現役選手のみなさんから

God gave me a chance

堀内 拓人(20期生主将)

西武台千葉高校バドミントン部は、20周年を迎えました。僕が生まれる前からバドミントン部はあり、僕と同じ場所でバドミントンをしていた先生、先輩方がいる。信じられないことですが紛れもない事実であり、とても長い歴史を感じます。この記念すべき年に、キャプテンを務めさせて頂いていることを誇りに思います。

僕は、本当であれば西武台千葉高校でバドミントンをすることはなくはずでした。それは、中学3年の時選んだ進路が埼玉の県立高校だったからです。インターハイにはまったく興味はなく、選んだ理由は、信頼できる先生がいることと、駅から1分で教室に入れるというものでした。試験にも無事合格して練習に参加しようとしていた矢先に顧問の先生が他校に異動してしまいました。その時は、とてもショックで裏切られた気持ちでした。



でも今思えばこれは神様がくれたチャンスだったと思います。「厳しい環境でやってみろ」「やるからには上を目指せ」きっとこんなメッセージがこめられていたのかもしれない。

その後、僕はたくさんの方にご尽力を頂き編入という形で西武台千葉高校に入学することができました。みんなから1週間遅れの入学でしたが、入ったその日から練習に参加しました。先生に怒られながらも必死にバドミントンをした高井田や青木、ターボーの中学3年間とは違い僕は毎日「朝早くない」「怖い先生がいない」「先輩がいない」という楽な環境でバドミントンをしていたため最初はまったく西武台の練習についていけず遅刻や欠席することがたびたびありました。そんな日々を過ごして臨んだインハイ予選は先輩達の力になれずインハイに出場することはできませんでした。その悔しさをバネにできたかは微妙なところですが、3年生が引退してキャプテンになってからは自分の中で意識は変わり、いろいろ考えながらバドミントンをするようになったと思います。

そしていよいよ戦いの時がやってきます。今年は5人の一年生が入り高校男子は11人になります。レギュラー争いもでてきてプラスの風が吹いています。この風に乗ってインターハイ出場を果たしたいです。残された時間は決して長くはありませんが、頑張りたいと思います。

浦井 美和(20期生)

私がバドミントンを始めたのは小学校3年生の時です。きっかけは、母がバドミントンを始めて、その練習と一緒に連れていってもらいました。それが私とバドミントンの出逢いでした。それからバドミントンが好きになり、岩名ジュニアに入りました。

小学校を卒業してからもバドミントンを続けて西武台に入りました。中学生のころは団体で全中に出ましたが2回戦で負けました。あとは特に目立った成績はありません。でも、中学の時はいろいろな事がありました。戸辺先生に「体育館に入るな」とか「ラケットを持つな」と言われたのは1回や2回ではありませんでした。椅子やサンダルを投げられた事もありました。それでも全中が決まった時は、ディズニーランドに連れていってもらいました。中3の3月には筑波山と一緒に登っていただきました。

そんな中学校生活もあっという間に終わり、私は西武台千葉高校の第20期生として2年前に入学しました。その年は野田でインターハイが行われましたが、私は出場することが出来ませんでした。でも先輩方は個人戦でベスト4に入るという素晴らしい成績でした。このような先輩方が代々、西武台のバドミントン部を良くしてくださったのだと思います。たくさんの先輩方から得たものは、今の私たちにとって貴重なものです。そして毎日とても良い環境で練習が出来るのも、先輩方のお陰だと思います。私は高校に入ってから、きちんと勝ったことがないので今年は本当に日本一になりたいです。まだまだ課題が多いので練習を頑張りたいです。

米山 健人(20期生)

西武台千葉高校バドミントン部20周年おめでとうございます。自分は20期生の米山健人です。ここでは自分がバドミントンを始めたときの話とそれからの自分を書こうと思います。

自分がバドミントンを初めてやったのは小学校3年生の時です。母が通っているバドミントンクラブと一緒に行き端の方で遊びでやっていました。何回も何回も母と一緒にバドミントンクラブで遊んでいるうちに母に「バドミントン習ってみたら？」言われ考えました。その頃、同じクラスに

サッカーとか野球とかバスケとかのクラブチームに通っている人達がいて「一緒にやろうよ」と言われていましたが自分はバドミントンを選び4年生から大宮ウィナーズというクラブに入ってバドミントンを始めました。

しかし、良い結果もなく小学校を卒業しました。それから中学校は西武台中学校を受験して受かったのに、自分は片柳中学校という学校に行きました。結局そこでも結果は良くなって、中途半端で中学校のバドミントンが終わってしまいました。そして高校は、前に自分がやめてしまった西武台に入りました。

「もし、中学校から西武台に来ていれば」という後悔をしたことは何度も何度もありましたが、後悔しても今さら変わりません。

普通に受験していたら頭のレベルがとどかなくて入れなかったはずの西武台千葉高校に、高瀬先生にスポーツ推薦で入らせていただきました。そのおかげで今こうしてバドミントンができていて本当に感謝しています。

みんなと比べ、まだまだバドミントンのレベルが低い自分をいつも見て教えてくださる稲田先生、ありがとうございます。今まで一緒に頑張ってきた仲間みんなありがとう。これからもまだまだ迷惑をかけることがあると思いますが、最後まで目標に向かって、夢に向かって走りたいと思います。

バドミントン部へのメッセージ

秋元 充(20期生)

こんにちは。僕は、西武台千葉高等学校の第二十期生の秋元充です。

僕は、この学校に入学して心から良かったと思います。それは、高瀬先生や稲田先生を初めとする先生方、先輩はもちろんの事、同期、そして後輩と様々な人達と出会い、多くの事を学べたからです。

例えば、返事、あいさつなどの礼儀作法や、周りの人達の大切さなどを学べた事です。

僕は、この高校に来る前は、すごく世間知らずで部活に入れてもらった当初は、周りの事に気を使う事ができず、先生や先輩に不快な思いをさせてばかりでした。ですが、西武台に入学して、バドミントン部に入部させていただき、先輩方と比べると、まだまだですが、以前よりは、回りに気を使う事ができるようになったと思います。例えば、他の人が今一番何がしたいんだろうと考えるようになった点です。以前は、自分の事だけを考えて行動する事が多かったのですが、少しだけ自分を以前よりコントロールできるようになった

一度きりの20年間



と思います。

これも、第一期生からの先輩たちのおかげだと思っています。僕は、高瀬先生や稲田先生の他先輩方がいたからこそ、今自分達が練習に励む事ができるのだと思っています。

この二十年間、代々受け継がれて来た教えを途絶えさせる事のないよう日々、取り組んで行きたいと思っています。

飯泉 綾乃(20期生)

20周年おめでとうございます。私がバドミントンを始めて10年。20年と一言と言っても西武台千葉には、その倍の歴史があることの重みをひしひしと感じます。私が生まれる前からやっていた西武台千葉のバドミントン部。20年前はコートラインもひいてなく、ひもをネット代わりにし、それでも今の私たちよりもっと厳しい練習をしていたのだと先生から教えて頂きました。20年間、先輩方が積み上げてきた歴史は、私は宝だと思っています。私は、すごくめぐまれた中で練習しています。コートは第一体育館8面、第二体育館6面、シャトルもぜいたくなくらい使っていて、練習時間も朝、日が出る前から夜、真っ暗になるまでできるという環境です。この環境できているのは、今までのOB・OGの先輩方、その保護者の方々、そしてこの部をずっと支えてきている先生方のおかげです。私は今、高瀬先生に朝から晩まで練習を見て頂いています。きっと先生が私のバドミントンを育ててくれているから、こんなにバドミントンが好きになったのだと思います。私が西武台中学校にいきたくと思ったのは、西武台のバドミントン部の選手に憧れたからです。いつも笑顔で声をかけてくれて、バドミントンもうまくて、かっこいいなと思っていました。髪型も西武台の人みたく切ってください！と言ったこともありました。本当に憧れました。私は憧れだった先輩方の後を追いま今こうして西武台千葉のバドミントン部にいます。私が思う先輩方のように、小学生や中学生からそういう風に憧れられるような先輩になりたいです。そして、今までの伝統を受け継ぎ、新たな歴史をつくっていきたくたいです。

梅田 有沙(20期生)

私がこのバドミントン部に入部してからも一年半以上が経ち、もうすでに折り返し地点を過ぎている。この一年半の間に多くの経験をさせていただいて、机上では習得できないようなことも学ぶことができた。

このバドミントン部が二十歳になる。そのことを聞いて私が真っ先に思ったことは、この部が今まで二十年間存続されていたことへの驚きだった。それは先生方や保護者の方々、そして一期生の先輩方から代々つくられてきた、たったひとつの歴史だった。私がこの世に生まれる前から、あの第一体育館ではラケットを振る音が、練習中の声が、トレーニングで流れた汗があったのだ。今は第二体育館が設立されれば毎日学校でバドミントンができる環境にあるけれど、先輩方の中ではシャトルも打てず、ネットもなく、それでいて練習は今よりも何倍も厳しい時代があったと伺ったことがある。私は想像すらつかない。ただひとつわかることは、二十年前からずっと西武台千葉高校バドミントン部には目標に向かって真っ直ぐに突き進む選手の姿があったということだ。

私は最近、高瀬先生から「真摯」という言葉を教わった。この言葉は“真面目でひたむきな様子”を意味する。私は最初に教わったとき、その言葉自体も漢字でどのように書くかも知らなかったのでもっとも恥かしかった。そして今までの先輩方が真摯な態度で一生涯懸命練習に打ち込んでいたことを知って、そんな姿こそが西武台らしきのだとわかった。そうだとしたら私の今の姿は先輩方には程遠い。もっと誰もが認めるような、本当の意味での「西武台の選手」になりたい。

そしていつも支えて下さる人々への感謝、バドミントンができることへの感謝だけは忘れず、一日一日を大切にしていこうと思う。

榎田 瞳(20期生)

創部20周年おめでとうございます。皆さんにとっての「充実した日々」とはどんな日々ですか？私は今の高校生活がとても充実していると思っています。確かに朝は6時から始まり、夜も遅くまで練習しています。先生に怒られたり、試合に負けて悔しい思いを何度もしています。でも、そんなことは西武台中に入学する時に覚悟はしていたし、入学してからも「あなたはふつうの子としての生活を捨てたんだから・・・」とか「自分できめた道でしょ！」と、何度も母に言われ続けてきました。そんなこんなでもうすぐ西武台バドミントン部の一員となって5年になります。

小学生の頃、ラケットの握り方も、振り方もわからず、羽根を当てるのがやっとだった私がここまでこれたのは、共に支え合い、競い合い、笑い合える仲間がいたからだと思います。“けんかするほど仲が良い”と言いますが・・・けんかはしません！だからといって仲が悪いわけではありません。仲間を思うからこそ本当のことを言う、そして一緒に1番を目指したい。お互いにわかっているからこそ「ああ、今のは私のために言ってくれたんだな」と思える・・・。なんて格好いい事言っていますけど、実際はまだちょっと遠慮しているところもあり、そんなにズバズバ言えるわけではありません。やはり“嫌われたくない”というのが本音です。残りの一年、お互い言いたいことははっきり言える、そんな仲間になりたいです。

もう一つ、ここまでこれた最大の理由があります。中3の夏、練習が終わって戸辺先生に、「おまえら何でバドミントンやってんだ？」と私たち内部生の5人は質問されました。皆さんはどのように答えますか？私たちは「好きだからです」と即答しました。みんなは覚えてる？これが最大の理由です。そのとき戸辺先生はビックリしたのか感心したのかわかりませんが、「たまに何でバドミントンやってるかわからなくなるんだよ」と言っていました。“初志貫徹”そんなことを改めて理解した日でした。

目標はみんな違うけれどみんな一緒。一緒に日本一になりたい。それぞれが目標としているもの、あるいは追いかけている人がいると思います。ちなみに私は今、必死に大日方と飯泉を追いかけています。

小・中学生の頃は2人の背中すら見えませんでした。しかし、高校生になって、シングルス試合で大日方とファイナルまでいきました。結局負けてしまいましたが、その時高瀬先生が他の4人に「えのはおまえらが思ってるほど後ろにいないぞ」とおっしゃって、正直うれしかったです。

他にも出来なかったショットが打てるようになったり、ラリーが続くようになったりしてますますバドミントンが好きになっていきました。

インターハイまで残り数ヶ月。この月日を長いと感じるか短いと感じるかは人それぞれですが、1日1日を大切に、それぞれが目標に向かい、達成できるように頑張らしましょう。大きなカシの木になれるように。

バトン

大日方 美弥子(20期生)

私達が生まれる前からあった、西武台バドミントン部。今年で、二十周年です。バド部の良き伝

統は、今の私達に、受け継がれていますか？私には、素晴らしい先輩方が沢山います。高瀬先生から時々、いろいろなお話を伺います。ネットやボール、ラインまでもがない状況での、練習をしていた先輩方。バドミントン未経験での入部。先生に叱咤されながらも、一途に先生を信じて練習に励む先輩方の話しには、ただただ凄いなど、思います。そんな事もあり、第一体育館での練習は、先輩方が私達を見て下さっているような気がします。



そんな話しをして下さる時の高瀬先生の顔は、何だかとても嬉しそうです。お話を伺っていて、私には足りないモノがあると気付かされました。ひたむきに打ち込む純粋な気持ち、それと謙虚さです。この頃、私の周りにあるモノ全てが、「あたりまえ」と思ってしまい、感謝の気持ちが足りません。先生、両親、先輩、後輩、同期、私をサポートして下さいる全ての人々。そして、毎日自分が大好きなバドミントンを、思い切り出来ることに感謝したいと思います。みんながいるからこそ今の私があります。それと、毎日の練習を新鮮な気持ちで取り組んでいない自分に、がっかりする事があります。先輩方に比べ、今の私達は体育館、シャトル、コートと、全てにおいて恵まれています。今の状況に甘えることなく、初心を忘れずに精一杯シャトルを追いかけていきたいです。二十年間、創りあげられてきたバトンをしっかり受け継ぎ、後輩に渡していきます。

「頑張れ、西武台！頑張れ、自分！！」

今後の私の目標

小山 文萌(20期生)

私は西武台のバドミントン部に入部して五年が経ち、六年目になろうとしています。長いようで早く年月が過ぎて最後の一年になります。

中一の頃はコートの中であまり打わず、よくステージの上で打っていた覚えがあります。今では、コートの中で打つのが当たり前になっていますが、昔の先輩方は、シャトルがなくてコルクを打っていたり、ネットがなくてひもを張っていたり、コートの線を自分達でテープを貼っていたと聞いたことがあります。今、私が練習している環境は、と